

(最終講義)

〃仏〃を問う「浄土学」・「仏教学」に対する

〃仏像〃を問う「仏教文化論」の研究とは…。

——齊藤孝の「増位山隨願寺木彫行基菩薩坐像」の研究を一例として——

齊藤 孝

私は、先程も紹介下さいましたように、元は長い間、岡山大学の美学・美術史専攻の教室を育ててまいりました。したがって、直接的には仏教学の世界とは違った所で、長年研究してきました者でございます。

さて、こちらの佛教大学の仏教文化専攻の大学院に博士課程が設置されることになり、その時に、仏教文化専攻の教授の一人でありました井上正先生が定年をお迎えになって、その後を埋めないと成立しないということでした。私は井上先生と同じ美術史学会の中で、同じ仏像彫刻の研究してきたことから、岡山大学の私の研究室に、井上正・成田俊治・池見澄隆という三先生が揃って来てくださいます、「井上先生の次に来てくれないか。」と三顧の礼でお迎え下さいました。それが私の岡山大学におきます定年と丁度重なりますので、平成九年からまず非常勤としてこちらで講義をさせていただいた上で、丁度二〇〇〇年の年に、正式に佛教大学に伺うことになりました。この五年間という短い間でございますが、佛教大学で専任としてお世話になってきたのですが、私としても、最初全く仏教学の世界と違う所から入るのでありますから、少し緊張してまいりましたが、私が何より嬉しいことは、この佛教大学におかれまして、専攻の先生方、あるいは旧仏教学科の諸先生方のみならず、文学部の諸先生全部挙

げまして、私を親しくお迎えくださいまして、この五年間何の煩いもなく、楽しく充実した佛敎大学の研究・教育生活を過ごさせていただきました。これを先ず心から御礼を申し上げます。

そして、私は先程の高橋先生とは違ひまして、佛敎大学にはたつた五年間過ごただけで、佛敎大学に對しましてこれということは何もしてこなかった、またその時間もなかった人間ではございます。したがひまして私としては、とにかく「仏敎文化専攻」のドクターコースを立ち上げて、スムーズに乗せれば私の役割が終るのではないかと思つておりましたところ、図らずも文学部におかれましては、満場一致で引き続き囑託敎授として遇し、「もうしばらく授業をするように」とおっしゃってくださいましたことは、私といたしまして誠に名譽なことと存じます。これも謹んで、心から御礼を申し上げます。したがひまして、ここで最終講義とは申しながら、高橋弘次先生も勿論同じでございますが、佛敎大学との御縁がここで切れるというよりは、担当する授業におきましてはなお佛敎大学に通わせていただきますので、もうしばらく宜しくお願いいたします。またいわゆる最終講義なるものは、あくまでも定年におきますセレモニーみたいなものでございまして、私も岡山大学の定年の時には最終講義をやりましたので、そういう意味で少し話を聞いていただきたいと思ひます。

さて、私が仏敎系大学に入らせていただいて、第一に最も強い印象を受けた要点をまとめますと、次のような事實でございました。即ち①広い意味での仏敎諸學は、いずれも「仏」とその信仰に對する「存在の真理」を問われている。②そこで、このテーマに迫る研究方法は、經、論、神呪、偈文、圖像その他の「仏典」を熟讀し、と同時に、問の思索に必要な周辺の幅広い「文献資料」をも収集し、それらの總合を下に、己の「理性的思索」の究極に、まさに「尊き仏」の存在を明証される。そしてその仏はあくまで「真理」として存在する。③但し、そこに明らかにされた「仏の相」を、いわゆる「仏の三身」になぞらえれば、少なくともそれは「法身仏」

・「報身仏」の相であり、従つて、それらはあくまで、現世において人間が感覺的に可視することの出来ない「実存体」でもある。④そこでこれまでの仏教諸学は、仏の現世での可視的「実在体」としての、第三身の「応身仏」たる「仏像」の「真実」としての在り様には、必ずしも十分な関心を示して来られなかったようにうかがわれる。と言ふことであります。

ところが、この「応身仏」たる「仏像」を直接的に取り上げてその実在性の「真実」を追求している研究者が、いわゆる広義の「仏教学会」とすら、一見では全く関係の無いかの如き学問世界であります「美術史学会」の中の、「仏教美術史」部門に多数集結しております。そして実は、この佛教大学仏教学科に「仏教文化専攻」が誕生いたしますに大きな契機となりました、杉山二郎先生や井上正先生は、いずれもこの「美術史学会」所属の研究者でありまして、私齊藤もまた、同学会の後輩として長年懇意を願つてきたものであります。従いまして、私をこの佛教大学へ最初に御紹介くださいましたのは、恐らく井上正先生ではないか、と思つておりますが、如何でございましょうか。

ところで「美術史学会」では、その本義はあくまで、広く「美術作品」及び「美術作家」の「在り様」の「真実」を「実証的」に追求する、「科学」を行います。そこで一般の皆様、取り分け「仏教学」研究の諸先生もまた、「美術史学者」は「仏像」を「絵画」や「彫刻」の一部としてしかみず、「仏像」から「仏」の一面は捨像してしまつてゐるのではないか。というお疑いがあるでありましようし、実は齊藤自身、今までそのような立場で、「仏像の美術史」「仏像の文化史」を、「美術様式論」を中心にして論じてまいつた者でありますことを、素直に告白いたしておきます。

ところが、これまた私の見方で今まで度々口にしてきたところでありますが、「仏教学」でとらえられた「法身

・報身仏は「尊き仏」であるのに対し、仏教美術史でとらえられた「応身仏」は、「美しき、良き仏」であります。従って「仏教美術史」は、逆に世に在る全ての「仏像」を研究対象にはいたしません。が、「美しき良き仏」の「真実」には迫る学でもあります。そこで、一度どこかの「美術史学会大会」に知らん顔をしてもぐり込まれ、仏像・仏画の研究発表を聴かれましたら、配布される資料も「仏典」ならば、発表者も質問者も、その「仏典」の解釈について激論を交わしており、常識的な意味での「美」・「美術」のことなど全然話に出てこず、そこで「自分は本当に今美術史学会に居るのか？それともどこか別の仏教学会に参加聴聞しているのか？」と、とまどわれることがあるかもしれません。即ち美術史学会所属の仏教美術研究者の多くもまた、「美しき良き仏」としての「応身仏」に迫る、別の「仏教学徒」であることを御理解いただきたいと存じます。

その意味で、日本国内の仏教系諸大学が主旨、「文献学」的手法を用いた「法身・報身仏」の存在研究を主体にして来られたのに対し、我が「佛敎大学」の仏教学科に、「浄土学」・「仏教学」に次いで「仏敎文化」の専攻を新たに興され、且つ「仏教美術史」のスタッフの充実に向かわれましたことは、ここに私が意識いたします。「仏の三身」の全てを公平に把握する研究・教育体制を、他に先立って樹立されましたことになり、私は、本学がその名の通りまさに「佛敎大学」の名にふさわしい体制になられたことを心より祝福しつつ、この五年間を過ごしてまいったのであります。

ただここで問題なのは、「浄土学」・「仏教学」は共にいわゆる「文献学」としての研究方法が一本に確立しております。ところが「仏敎文化」の中の特に「仏教美術史部門」の研究方法は、個々に実在します。「仏像」の在り様を探る学問でありますから、それぞれの局面で、問題を解く研究手法はきわめて具体的に多様な方法を発見し、駆使してゆかねばなりません。従って、その方法論は一元的・論理的に提示することができず、その研究者が経験的

且つ実証学的方法で、ある命題を具体的に解き得た時、結果的にその方法・手段が、仏教文化の研究法としてまさに正しかったことをも、共に実証してくれるのであります。そこで、この最終講義の論題に即しまして「姫路市・増位山隨願寺木彫行基菩薩坐像について―主として赤松則祐をめぐる資料的価値を中心に―」という具体的な論文を皆様にお渡ししましたので、その内容は後でゆっくり御覧下さるとして、ここでは、このテーマの解明にどのような手段を用いたのかを述べてまいります。

まずお渡しした論文は、平成十六年に、私の母校の一つであります関西大学文学部史学科の『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』に発表した、齊藤の最新研究論文でありまして、併せまして同十六年三月に、前年の平成十五年十一月に、私が国の文化庁から「地域文化功労者文部科学大臣表彰」を受けました、その「祝賀会」が岡山で開催された時、出席者に既にお配りして、しかもその祝賀会には、佛教大学からは池見澄隆先生が、わざわざ岡山までお出に下さいましたので、これは池見先生のお手には既に渡っておりますが、他の先生にはまだお目に掛けておりませんので、この場を借りましてお目をお通しいただくことにいたしました。

そこでまず、齊藤がどういう発想からこの論文を書く気になったのか、と御出席の先生方が考えられた時、私の勝手な想像なのでありますが、恐らく次のようなものではございませんか。それは、元々行基菩薩についての研究は、既に世に数多発表されているから、それに引かれて齊藤もまた「行基菩薩」に関心を持った。そして、そのような眼で資料を探索していたところ、これまで殆ど世に知られていなかった、姫路市の隨願寺にその木彫像を発見し、それを世に紹介することを通して、「行基菩薩」をめぐる諸命題に一つの新しい局面を照射しようとしたのであろう。と。ところが実は、このような発想こそがまさに「仏教学者」としてのお考えなのであります。仏教文化論者「就中「仏教美術史家」の齊藤は、全く違う角度から迫っていったのであります。元々齊藤が隨願寺の行

基菩薩像を知りました契機は、姫路市の教育委員会文化課から「この度増位山隨願寺開山堂を修理のため、内部の高僧像を初めて本堂に搬出したところ、何か古そうなので、周囲から姫路市指定重要文化財にならないか。という声が挙がってききましたので、かねてより姫路市文化財保護審議会委員であり、殊に仏教美術の専門委員であります齊藤先生に、調査と共に指定の可能性を評価して下さい。」と依頼を受けたことにあります。そして最初に私の前に与えられましたのは、お配りしましたプリントの掲載図版第一図の「僧形像」それ自身でありました。その時の私の第一声は「ははーっ。成程。これは面白そうな御作ですなーっ。」であつたと思います。これは、長年仏教美術史を研究してまいりました一学徒の、経験から発せられる直観とその感動であります。そして、この最初の言うに言われぬ「感動」の発声なくしては、その後の事は一切進みません。何故ならば、この第一図の僧形像には、これから申し上げるような数々の不明点や疑問が立ちふさがっているからであります。①この像は御寺伝である「行基菩薩像」に間違いないか。②本像は当初像か。それとも完全な後世の写しか。でなくば当初のオリジナル部分はどこに残され、どこに何年頃の補修が入っているか。③本像は何年に彫られ、従つて何時代の作か。④造立の仏師及びそれに関与した工匠は誰か。⑤造立願主は誰か。そしてその願意は如何。⑥本像への結縁者は居るのか。居るとすればどのような人々か。⑦長い隨願寺の歴史の中で、本像がどのような契機で造像発願が成され、また本像が無事に今日までどのようにして護り伝えられてきたのか。以上、ざつと考えてもこれだけの説明すべき問題が私の頭に浮かんだのであります。それを説明するに、最初は何をどこから手を付けてゆくのかさえ解らず、全く取り付くしはありませんでした。

そこで一般の皆様は、この段階で既に「これはかなわん!。もしも好きな人があつたら勝手に調べてーっ。」と、あつさり白旗をかかげて退却されるところでしょう。ところが、この像から受けた不思議な「感動」にひかれて、

「よし！人が仕なけりや俺がやる！」と言う気になってしまふのが、生まれつきの美術史学徒の性なのか。

では、それに向う第一歩は、やはり当該像の現状に対する直接的な「実態調査」に始まります。例えばテレビの刑事ドラマで、主人公の刑事が「捜査に行詰った時は、兎に角「現場」に戻れ！」と言うセリフを口にする事が多いように。そこで、まずそのお寺の御住職によくお願いし、御像を御厨子から出して調査者の手に一切ゆだねていただかねばなりません。

次に、調査の第一は該当像の「実測」で、御像の法量をまず確認しました。そして第二が像の現状の「徹底観察と記録」で、これが調査の根幹になります。随願寺像に則して申しますと、①像の表面は少なくとも江戸時代以後の後補彩色に覆われておりますので、表面的には「近世以後」の作と判断されても仕方の無い状況を見せておりますが、色彩の下の像自身の彫刻様式は、明らかに「中世」に遡ること、②像の胎内より夥しい墨書を発見し、その「判読記録」を、プリントの「行基菩薩坐像胎内墨書」として提示。なお判読の正確を期すため、同じ姫路市文化財保護審議会委員であり、「日本史学」専攻の京都橘女子大学教授（当時）狩野久氏、及び梅花女子大学教授馬田綾子氏より判読意見を徴し、（一）で包んでお示しました。③この墨書の内から、本像が御寺伝に間違いのない「増位山行基菩薩」の明記を確認しました。④造像年紀「観応貳辛卯年九月日」と「洛陽大仏師大藏卿法印定西当山大仏師也」「大工掃部左衛門尉平宗長」「塗師法阿弥陀仏 洛陽住人也」から、本行基像は観応二年（一三五二）九月、十四世紀の南北朝時代の造像で、造仏工匠も京都の人物であることを確認しました。⑤そして、ここで最も肝腎なことは、随願寺衆徒が、折柄大覚寺統（南朝）と持明院統（北朝）の激しい武力対立という、日本全体をゆるがす大争乱の最中に、開山の木像の胎内最頂部へ、去る暦応二年（一三三九）崩御されているとはいえ、ま

さに南朝方政権の象徴である後醍醐天皇と、一方、北朝方を支える彼の征夷大將軍の足利尊氏より播磨国守護を与えられ、また父の赤松円心と長兄の範資が立て続けに急逝したことにより、次兄の赤松貞範をさしおいて赤松氏の総領をも相続したばかりの、円心の三男赤松則祐の名を、「後醍醐御門」「当国守護赤松妙禪律師則祐」と併記して、一方の菩提と共に、もう一方の武運長久をも祈願したという、重大な歴史事実を発見しました。

しかも、自分はまさに北朝方に組し、足利政権の中枢に坐っていると自他共に認めている赤松則祐が、事もあるうに敵方の後醍醐天皇と肩を並べて祈願されると言うことになれば、もしもこれが発覚すれば、赤松則祐の南朝密通、足利尊氏への裏切りと扱えられて、赤松氏自体の存亡にかかわる事態を引き起しかねません。ところがそれを、赤松則祐自身が許しているらしい事が面白いではありませんか。

ところが、当時の足利政権内部は、対南朝との政争と同時に、足利尊氏自身が弟の足利直義、及び執事高師直との間に、命懸けの内紛をかかえており、この北朝方の内紛争動を、日本史の上では「観応の擾乱」と呼んでおりますが、実は観応二年九月における赤松則祐の大きな賭けともいえる政事行動が、この年の十二月に足利直義の自害によって、足利尊氏の最終勝利へと決着する道筋を付けた結果となり、その後の赤松氏は義則・満祐と代を継ぐ間に、室町幕府の「四職」の一角に坐を占める繁栄を謳歌いたします。そして、この度発見の随願寺木彫行基菩薩坐像は、その「観応の擾乱」と、その後の赤松氏を占う重要資料として存在する、貴重な歴史資料でありますことを明らかにすることができましたが、これには、例えば広島大学教授（当時）岸田祐之氏や、赤松氏の伝記を詳しく研究されました高坂好氏著『赤松円心・満祐』、ほか多くの学者の先行論文より勉強させていただき、遂に私なりの結論を得た次第です。なお研究の詳しい経過は、今後お手元にお渡し私の論文コピーをお読み下さい。

さて、私の論文には「本文」のほかに「注」は勿論「史料提示」、「参考文献と研究協力者の明記」も付けており、

ここまでは「文献学」の論文と何ら変わりません。ところが、私の論文には更に「写真図版」がついていることが、まさに他とは異なる「仏教美術史」論文の特徴であります。そこで第三の「写真撮影」という調査法の意義を申し上げますと、我々は「仏像」という「視覚作品」を問うわけでありますから、その命題は「文章言語」で表現されるばかりではなく、像それ自体の個々の「部分形態」もまた、命題の直接的意味を研究者に「イメージ」として語り告げ、研究者は、その「直観」を通して意味を読み取ります。即ち、美術史論文の「写真図版」は、「文章言語」と並ぶ、いわば「造形言語」なのであります。従いまして、第三の「写真撮影」という調査手段もまた、ただ漫然と像の全身像を写しておけば良いとか、「文章言語」の理解を助ける単なる補助手段、という単純なものではなく、論文の命題を具体的に語る本質的意義を持つものであります。そして美術史学徒は第二の「観察と記録」の段階で、併せてこの像を対象とする研究論文の構想を考えつつ事を進め、その構想を具体的に組み立てて説明してくれる「部分」を、自ずからの判断で見出して、自ずからの判断による対象への「照明」・「撮影角度」をも決定して、撮影するのです。

しかもこの撮影は、今御住職から与えられている唯一回の調査機会を逃しては、まず在り得ません。何故ならば、深い仏教信仰をお持ちの御住職であればある程、「我々自身でさえ、滅多な事では恐れ多くて像に手を触れることをはばかり、通常は御厨子の中に厳封し、御開扉しても御図帳の中に臨まれるお姿をはるかに合掌礼拝するばかりであったのに、今回御像を「文化財」に指定するためと言え、「学者」と言う一般人の手にゆだねたばかりに、調査と称して、像をひっくりかえして胎内をのぞくやら、あまつさえ、尊い御首まで引き抜くなど、これまで考えもしなかった不敬な扱いを許してしまったことは、御仏に対してまことに申し訳なし。今後は二度とこのような所業は認めない!。」と固く誓われることは、目に見えて明らかなのであります。

従いまして調査させていただいた美術史学徒もまた、宗教的に「尊い仏」に対して、まさに形而下的な「科学」の手法で接近することに御目をつぶって下さいました、御住職の深い当方への御理解に對しまして、いつも感謝の念を失つてはならない。と私もまた心の誓つているところでございます。従いまして私の論文に眼を通されます先生方もまた、第1図から第19図に至ります図版写真の数々が、私の論文構想に如何に重要な役割を荷担つて並べられているかを、本文との比較参照の上、十分に御理解下さいますようお願い申し上げます。

さて、以上長いお時間をいただきましたが、私の最終講義『仏』を問う「浄土学・仏教学」に對する『仏像』を問う「仏教文化論」の研究とは……。――齊藤孝の「増位山隨願寺木彫行基菩薩坐像」の研究を一例として――の主旨は、ここにはぼ述べさせていただきました。そして今、我が佛教大学も将来への改組計画が進行中で、これまでの意味での「浄土学」「仏教学」「仏教文化」「三專攻の枠組が、そろそろ流動化しつつあるやに思われます。私は、その将来を見届ける立場に最早ございませんが、少なくとも『仏教美術』系組織の再編に責任を背負われつつ、本最終講義の司会をつとめて下さっております小野田俊蔵先生が、先程の私の御紹介の中で「当方ではやり切れないところを、齊藤はやってくれた。」とおっしゃって下さいましたことを、佛教大学仏教学科で五年間の務めを今終ろうとしております齊藤は、これ以上のもの無き饞けのお言葉として頂戴しつつ、この講義の壇を降りさせていただきます。まことに有難うございました。

以上

(当日配布資料)

姫路市・増位山隨願寺木彫行基菩薩坐像について

——主として赤松則祐をめぐる史料的价值を中心に——

齊 藤 孝

はじめに

筆者齊藤は、現在姫路市文化財保護審議会委員を務めているが、この度姫路市白国の増位山隨願寺において、開山堂の解体修理に伴い、本尊の伝行基菩薩坐像を厨子より本堂へ搬出したところ、胎内に夥しい墨書のあることが判明し、粗々に目読しても、かねての寺伝の如く、本像が紛れ無き「行基菩薩」に違いないことが明記されているばかりではなく、観応二年（一二三二）九月の紀年銘によって、本像が中世の南北朝時代に造立された高僧像の一例ではないかとうかがわれることから、姫路市の文化財指定への意向が周辺から起ってきたので、専門委員としてその可能性を調査してほしい。との依頼を、姫路市教育委員会文化課より受けることになった。

そこで筆者は、平成十二年（二〇〇〇）七月六日、同文化課の御世話を受けつつ増位山隨願寺に参り、本像を親しく調査させていただいた結果、

- ① 像の表面・彩色が後世の塗り直しになっているため、一見しては比較的新しい作像のように受け取られ、さし

づめこの点が疑念の一端となっていたが、よく観察すると、その下にある像の材質や造像法・表現法などからみて、ほぼ観応年代の当初像と判断できること。

② 体部材の胎内面に記されている墨書もまた、書風からみても中世を否定する根拠に乏しく、むしろ十分に当初の墨書と判断できること。

③ その墨書を精読すると、観応二年当時の播磨国守護赤松則祐の政治動向をうかがう重要な内容を含み、日本中世史の上に一石を投じる史料ではないか、と判ぜられたこと。

④ 日本美術史的見地からみても、御衣木加持僧・大仏師・小仏師・木寄番匠・塗師にわたって、作者名が完全に揃っている造像銘文は数が少なく、今後に必要な参考資料になる、と判ぜられること。

⑤ 夥しい結縁交名には、増位山随願寺の当時の役僧や、檀那と思われる地元の武士、惟宗氏一族の名が数多く含まれており、もしも今後これら一人一人を追求してゆけば、この墨書から受け取れる歴史的情報は、ますます広くなると期待されること。

⑥ 「観応二年」の紀年の書し方に、ある特色が見出されること。

⑦ 本行基菩薩の造像法自体の中にも、前記の政治的状況を思いつたかと思われる、特殊な手法が判ぜられること。

など、数多くの注目すべき問題点を検出するところとなった。

そこで齊藤は、この随願寺木彫行基菩薩坐像は、姫路市指定重要文化財として十分に資格あり、との報告と所見を姫路市に寄せ、平成十三年（二〇〇一）八月十七日の姫路市文化財保護審議会は、正式に指定を決定して姫路市に答申する運びとなった。

そこで齊藤は、ここに新出の隨願寺木彫行基菩薩坐像を、より学術的見地から斯界に広く紹介しつつ、齊藤の所見も併せて世の御判断をいただくことを念頭にするに至り、また、かねてより隨願寺当局及び姫路市の文化課から、論文発表の御諒解をいただくところがあつたので、おりから齊藤の母校である関西大学の考古学研究室より、『関西大学考古学研究室開設五十周年記念論叢』への寄稿を求められたことを好機として、先程の念願を果さんとするものである。

第一章 増位山隨願寺略縁起からみた行基菩薩

兵庫県姫路市は、昨今来世界文化遺産ともなつた、天下の名城姫路城（白鷺城）天守閣が、ますます市の名を高めているところである。そこで今日、新幹線やＪＲ在来線の「姫路」駅に降り立てば、真先に彼の天守閣を仰ぎ観ない者は、一人として居ないことであらう。ところがその我々は、この高々と聳え立つ白鷺城天守閣の彼方に、穏やかに続く標高約二〇〇メートル余りの青い山並を、美しく眺めもするはずである。

この山並の内、西北の端に一段と高く聳える峯が、天台宗では播磨隨一の名刹で、西国三十三所靈場第二七番の札所でもある、彼の円教寺の建つ書写山であるが、これより眼を東方へ移してゆくと、姫路城のちやうど真北に当る背後に、これも有名な広峯山が臨まれる。その広峯山のさらに東に隣る一峯が、ここに言う増位山^{まゐやま}であり、隨願寺は、この増位山の中腹に開かれている。そして、これら山々の前方平地に拡がる姫路の街並は、池田輝政が築いた現姫路城の城下町として創つてはいるが、この地域には元々播磨国衙が在り、それなりに当国政治の中心であつたから、播磨の有力社寺が、その中心に程近い背後の山々を靈場化してゆくのは、これまたある種の必然があつた

ことであろう。^①

さて、増位山隨願寺については、現在の寺に確実な史料があまり伝わっていないようでもあり、また、少なくとも室町時代以降の寺歴は、本行基菩薩像に直接関係はないので、本稿では隨願寺の縁起の全体に及ぶことは避け、像の成立に関する事項についてのみ記述することにした。

ただし、隨願寺所藏文書の中の乾元元年（一三〇二）誠観内供記による『播州増位山隨願寺集記』^②が、隨願寺の縁起を知る根本史料のようで、寺歴を説く論攷も、多くこれに依っているものようである。^③

それによれば、古くインドの阿育王が造立した八万四千塔の内、その中の二基が日本に達し、一基は近江国蒲生郡の石塔寺^④となり、もう一基が増位山に至ったと言う。そこで聖德太子が伽藍を興して薬師仏を安置され、高句麗の渡来僧慧便が住した。

続いて、天平年中に、行基が朝廷に奏して金堂・講堂・七仏堂などを建立し、伽藍を大いに整備すると共に、弟子の徳道法師が住した。

寺は、奈良時代から平安時代の初めにかけて鎮護国家の祈禱に励み、法相宗でもあったが、義真の門派が入寺するにおよんで次第に天台宗に改宗し、仁明天皇の代に金堂・根本堂・四天堂・大講堂・太子堂・行基堂、それに鎮守の牛頭天王・白国・佐伯・春日・白髪・松尾・住吉の各明神社を修補し、さらに法華堂・常行堂・食堂・塔二基・鐘樓を新たに建て加え、その上七所三十社を勧請した。

その後しばらくの事項を省略し、後鳥羽院の文治元年（一一八五）正月、勅使を以て天下太平国家安穩の祈願に預つて以来、最勝・法花・尼王の三会を恒常的に開くようになり、新たに吉祥天護摩堂・山門・鐘樓二字・密乘殿護摩堂を建立、山門には「増位山」の二額を掲げた。なおこれらの造営は文治五年（一一九〇）三月に完成し、詳

しい勅定年中行事式目も定められた。この文治年間が、隨願寺の歴史においても、発展の最盛期と捉えられているようである。その後鎌倉時代を通じて、朝廷・幕府・公家を挙げて数々の祈禱・修補・所領安堵の事が続いた。

さて、ここに推測されることは、隨願寺の実質的な発足は、やはり天平年中の行基菩薩及びその徒に依るものと言う認識が、伝統的に伝えられてきていたことは明らかであって、そこで中世当時の隨願寺においても、何らかの契機があれば、開山上人としての行基菩薩像を造立供養しようと願う動機は、潜在的には十分流れていたことを、ここに確認しておきたい。

第二章 隨願寺木彫行基菩薩坐像

(一) 形状・品質・構造など

この度世に出る高僧像の一体〔図1〕は、像高九五・〇センチの坐像で、身にはまず左前合の白下衣を着し、その上に大袖口を開く黒衣を重着し、一番上に赤褐色の袈裟を懸け、両手を膝上に禪定印を結んで結跏趺坐している。その頭部や両手先などの肉身部には膚色を塗り、眉も太く黒色の毛描を引く、口は薄唇を閉ざして朱を指す。

面相は、頭頂・側頭・額中央などに意識的な肉盛りを持たせた、少々凹凸の目立つ個性的な頭形〔図1・6・7〕に、上眼窩の凹んだ半眼の眼は、やや微笑を含みつつも、眼奥には一抹の厳しい目指を秘め、閉じた薄唇も、これまた一見微笑も含むものの、眼の表情に応ずる引締まりを感じさせる。かくして本僧形像の面相には、やや異色の靈氣が籠っているようにすら感じられる。この肖像が行基菩薩であることは、後に説く胎内墨書〔図11〕の語るところによって明らかである。

この彫刻は木彫、寄木造、玉眼嵌入、彩色になる。木寄を判ずるに、頭部は側面耳後の線で一木を前後に割^わ刳^{はき}とする。また後補の表面彩色により確証はないが、あるいは頭背や面部も縦刳になつてゐるかもしれない。そして頭部内は広く内刳を施し、眼は頭内から玉眼を入れ、首の裾は体部の僧衣襟内に挿首とする。〔図6・7・8〕

体部の木寄を観ると、体部の根幹材は前後二材刳に別材を寄せ、その前方材の前へ腹前部をもう一材刳ぎ足して、前後三材刳としているもようである。しかも腹前刳足し材は、さらに左右二材刳となつてゐる。

この軀幹材は像底から広く内刳「図9」を入れているが、その頂部には首柄の挿穴を穿たず、むしろ其所を逆^{さか}に厚^あく^く刳^くり^り残^{のこ}してある。と言うことは、外部から軀幹材の頂上に開く襟穴をのぞけば、襟底はそのまま胴内に貫通せず、むしろ首部を受ける棚板によつて塞がれてゐることになる。そこで首部は、胴に挿^され^ると^いふ^{やう}に^も、襟^の底^の棚^の板^の上^のに^あん^ぜん^され^てゐ^ると言^うに^近い。これが本像の構造上の第一の特色である。

次に軀幹材の左右へそれぞれ脇材を寄せるが、これも前後二材刳に寄木し、後方材は肩・上膊・腰奥を製し、前方材は下膊・僧衣の袂及び袖・腰前半部を製す。そしてこの下膊脇材は、軀幹材と共通して連続的に広く内刳されている。

ところが注目すべきは、この軀幹材と脇材の接統法であつて、まず軀幹前方の下端左右に、その下へ更に伸びる一對の長方形の柄を刳り残し、一方脇材前方材の左右内側から胎内方向へ同様の方形柄状突起を刳り出し、その木口を、先に述べた軀幹前方材柄状突起の側面へ、直角に接合させてゐる。

さらに軀幹材の下端から前方へ張り出す膝部の接合法も複雑で、膝材自体は基本的に大きく一材木取で、底側から広く内刳を入れる点も定法と言えるが、一方、禪定印の両手首下に当る膝中央部の、腹部前に接する所に、左右二材刳の刳木を入れ、これに、膝材内端の中央部の左右に刳り残した方形柄を嚙ませると言う形で、体軀に膝を接

合しているのである。

以上の各部材を胎内で接合するに際し、現在では多く鉄鎚を打っており、漆による矧合せ箇所は限られている。内刳の刀法は比較的粗く、平鑿の鑿目がよく立っているが、ただ墨書を書く面だけは、さすがに平滑に均らそうとする努力の跡がうかがえる。

そのほかの寄木では、禪定印の両手先を一材で彫刻し、両手首末端を左右それぞれの袖口に挿している。また、膝頭下端地付左右に張る袂先部材も、一種の三角材として別木を寄せているもようである。

以上、いずれにせよ本像は正しく寄木造手法になり、わけても部材が複雑な刳り残しの胎内束で接合の計られているところが、構造上の第二の特色と言えようが、ただこのような寄木造法は、平安や鎌倉前半期の古い年代では見当たらず、少なくとも十四世紀後半以降に多くなるのではあるまいか。この事は、像表面の作風や、胎内墨書にみえる造像年紀によっても裏書されている。

第三に、像の表面は現在胡粉地彩色が生々しいが、これは少なくとも江戸時代後期以後の補彩である。ただしその一段下には、まず砥粉地を布いた上に黒漆の彩色下地を置いた痕跡が認められる。事実、いずれ(二)で述べる墨書の中でも、造像工匠メンバーの中に「塗師」の名が記録されている。「図13」ことは、この際注意されよう。また、寄木矧目には、像の表からは漆で布貼を施していることがうかがわれる。

(二) 胎内墨書と解釈

本彫像の胎内には夥しい墨書が記録されている。その詳細は、別に掲載する墨書判読記録と写真図版に依られたいが、ここではまず墨書②「図11」から読んでいくと、冒頭に本像が「行基菩薩」の肖像であることを明示してい

る。次いで権律師俊賀以下夥しい僧名が並ぶが、これは一応、増位山隨願寺の關係僧侶とみてよからう。

ここで美術史学的見地からみて重要なのは、この行基菩薩を實際に制作した工匠關係者が、実に丁寧に記録されていることである。まず、行基菩薩を彫刻してゆく材、即ち御衣木に加持を修したのは、東寺流阿闍梨快弁〔圖12〕であつた。そこで、加持を受けた聖材を行基菩薩に彫り上げたのは、洛陽（京都）の仏師で、大藏卿法印を名告る大仏師定西〔圖13〕であつた。しかも定西は、当山大仏師として増位山隨願寺出入りの仏師權益をも握つていた。

この大仏師名の次に大工・宗長〔圖12〕の名がみえるが、これは、この行基菩薩が明らかな寄木造であることから分るように、予め御衣木を調材し、併せて寄木の木組を担当する、いわゆる番匠役の木工である。

第三に、大仏師の彫り上げた像の表面には、漆をかけて彩色下地を整えねばならないが、その担当者が塗師の法阿弥陀仏〔圖13〕で、彼もまた、地元播磨の工人ではなく、はるか中央の京都の住人であることが宣揚されている。いずれにせよ、一般の造像銘文に登場する工匠名は殆ど仏師名のみであつて、このように御衣木加持僧・木寄番匠・塗師に及んでまで記録されているのは、むしろ珍しい事例に属し、しかも、この度は特に都の工匠に依頼したことを強調しているのは、この行基菩薩の造像が、増位山隨願寺にとつて、いやが上にも重要な行事であつたことを暗示している。

その重要性の一つは、②の末尾に記された年紀が觀應二年（一三五二）九月〔圖13〕であること、そして、①の墨書〔圖10〕が、去る暦應二年（一三三九）八月に亡くなっている後醍醐天皇の追善と、この年まさに播磨守護職に就いた、赤松則祐の安穩を願つてにあることにある。ところで、時局はまさに南北朝動亂の渦中とは言え、全体としては足利氏の支える北朝方の優勢に推移して行くのが、その後の歴史的事実であり、当時の赤松氏もまた足利氏

の幕閣重鎮であつた。その赤松氏が、敵対側の吉野朝の後醍醐天皇と並んで記されるとすれば、考えようによつては、赤松則祐は政治的に、何らかの禁忌に触れていることになるのではあるまいか。それを則祐が敢えて許しているとするならば、この年前後の赤松則祐の動向如何が、きわめて注目すべきことにならう。

そこでこんどは、ひとまず一足跳びに墨書④「図15」に目を移してみると、そこには「惟宗朝臣」を本姓とする武士の名が連なっている。その彼らは恐らく当西播磨における赤松配下の在地武士で、主君赤松則祐が今まさに播磨守護に就いたその事を記念して、後醍醐帝の追善と主君の安穩を祈願するこの造像に、彼らもすすんで檀那の列に加わるることによつて、則祐への忠誠の一端を表したのでなからうか。さすれば当時の播磨守護赤松則祐と、配下の惟宗氏の動向は、歴史的に重要な課題となり、本墨書銘文の中でも最も本質的内容の部分と考える。そこで、この重要事項について、第三章にまとめて論究するので、識者よりご教示いただくところがあれば幸いと考へている。それはさておき、本墨書中のその他の事項についても、述べなければならぬ注目点は多々存在する。その一つは、先にも述べた観応二年九月の日付の書き方「図13」である。と言うのは、ここでは干支の「辛卯」割書が、「貳」と「年」の間に入っている。ところが、中世世代における干支割書は、「年」と「某月」との間に來るのが常識で、この墨書のような書き方は、むしろ近世の江戸時代に定着するのである。されば、干支割書が年字の上に来る書法の例として、これが最も早い時期となるのではなからうか。

さらに墨書③「図14」は、②の後半にみえる結縁衆交名の続きのように判ぜられるが、その中で「兵部法眼定祐」と「備中法眼定幸」「図14」は、共に僧綱位を称し、且つ定西と同じ「定」字を名に用いているところからみて、二人は大仏師定西と同派の仏師と思われ、彼らは大仏師定西の下に分担制作者たる小仏師として行基菩薩像の制作に参加したことから、結縁衆に加わった可能性が高い。とするならば、御衣木加持僧に始まり、大仏師・小仏

師・番匠大工・塗師にまで至る、制作スタッフが全て記録されている本造像銘は、同類の中でもより完璧な内容の一例として、ますます高く評価されよう。

第三章 播磨国守護赤松則祐と在庁官人惟宗氏の動向

さて第二章における墨書銘文のうち、①・②・④について、ここに改めて内容を分析してみたいと思う。

〔図10〕

まず①は、本行基菩薩像にかけられた本[・]当[・]の[・]祈[・]願[・]を書しており、即ちこの像は、去る暦応二年（一三三九）八月に亡くなった後醍醐天皇の追善と、観応二年（一三五二）当時、播磨国守護職に就任したばかりの赤松則祐に対し、その安穩を祈るものであった。この政治的問題について先にも指摘したところであるが、これを理解するためには、当時天下を覆っていた、世に「観応の擾乱」と呼ばれる大騒動を、十分に知っておくことが肝要である。ただ筆者は中世政治史には門外の一人であり、どこまでも日本仏教美術史を専攻する学徒に過ぎないので、当時の政局を語るに当っては、専門学者の論攷に頼りつつ、しかも本行基菩薩像に関わる一面のみを、粗々筆者の理解として述べるにとどまることを、予めお断りしておきたい^⑤。

さて、そもそも赤松氏が歴史の舞台に登場するのは、赤松則村（円心）の代からである。それ以前の発端については、村上天皇の第七御子である具平親王より数えて六代の末裔にあたる従三位の季房が、十二世紀初期頃に播磨国佐用荘に流されて土着した。その四世の孫にあたる宇野則景の末子家範が、元来は千種川の上・中流に亘る、佐用・宍粟・赤穂三郡にまたがる大きな莊園であった佐用荘内の赤松村を本領とし、初めて「赤松」の姓を興した。

その四世の孫が赤松円心である。赤松氏はけっして鎌倉幕府の御家人ではなく、あくまで在地の悪党として身を興して来た。

おりから北条幕府政權の衰退と、全国の武士に不満がみなぎる情勢に、二派の皇統のうち大覚寺統の後醍醐天皇が、政治権力を武家より朝廷に取り戻す目論見から、鎌倉幕府の打倒に立ち上がられると、全国の反幕府の武士が多くこれに呼応するに至り、赤松円心も時勢の赴くところを冷静に察知して、逸早く後醍醐方に馳せ参じ、皇子・大塔宮・護良親王へ三男の則祐を側近として送り込み、自らは令旨を受けて元弘三年（一三三三）二月二十五日、赤松村の苔縄城に挙兵した。これ以後赤松氏は、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて、一家の武運を日夜の連戦に賭けてゆくことになる。が、兎にも角にもここに赤松円心・則祐父子には、後醍醐天皇とその後の南朝方に、何らかの親しみの心を残す契機になったことは疑えない。

そして赤松円心は、北条幕府の本拠鎌倉を攻め陥して上洛に向かう、関東の新田氏や足利氏よりも一歩先に、直接に京都を北条幕府勢から解放し、一時は隠岐に流刑になっていた後醍醐天皇に、京都還御の道を拓いたのである。従つて、晴れて京都に建武中興の新政を開かれた後醍醐天皇にとつて、赤松円心は当然に、無二の功臣たるべき筈であつた。

ところが建武の新政は、朝廷・公家の思惑と、北条幕府への不満から後醍醐天皇に従つてはみたものの、本々は、武家政權の確立を目論む武士一般との間に、たちまちにして利害の衝突がおこり、再び、政局は混乱に陥つた。そこで、足利尊氏が新政府に反旗をひるがえし、遂に後醍醐天皇を大和の吉野に追い落として、もう一方の皇統である持明院統の天皇を戴く主都の政權を樹立した。この時点で我が国には、京都と吉野に二つの皇統が並び立ち、それぞれが自らの正統を訴えて天下を二分することになったから、まず全国の武士団は、この南北朝のどちらに加担

すれば、その後の武運につながるかの、厳しい踏絵を突き付けられることになった。事実、何も全ての武士が逸早く足利方に付いたのではなく、なお吉野方に希望をつなぐ一派には、有名な新田氏や楠木氏などが居たのである。そして足利尊氏自身が新田義貞らの力に屈して、一時九州へ逃げ走り、再起を計らねばならなかった。

このような時局の中で、赤松円心にとつても建武の新政は、失望以外の何ものでもなかった。即ち赤松円心には、自分こそ後醍醐天皇の復権を援けた第一の功労者、との自負があつたにもかかわらず、その後を受けた待遇は実に論外の沙汰であり、楠木正成や名和長年さえが河内や伯耆の国司に任ぜられたにもかかわらず、彼は漸く播磨守護に任ぜられたのもつかのま、護良親王の失脚に連坐するように、たちまちその守護を召し上げられて新田義貞の方へ廻され、自分はかろうじて本領たる佐用荘を安堵されるに止まった。

裏に複雑な事情があつたとしても、後醍醐天皇から受けたこの仕打ちに對して、必要な時には命懸けの奉公を命じながら、事が終われば早速に使棄にされた我身の姿が、円心の眼に強く焼きついたものか、赤松円心は突然のように後醍醐天皇の下から足利方へ走り去ったばかりか、やがて九州から東上してくる足利尊氏軍の文字通りの先兵となつて、後醍醐方の総大将であり、且つ播磨守護でもある新田義貞の討伐軍を白旗城に迎え討つて逆に撃破し、瀬戸内海を上つて来た足利の本軍を迎えた上、有名な湊川の戦で楠木正成を自刃に追い込み、尊氏の京都帰り咲きを開いた。かくして赤松円心は、今度は足利方の無二の功臣として迎えられ、建武三年（一三三六）十月頃、正式に室町幕府初代の播磨守護職に任ぜられた。これ以後赤松氏は、中央では室町幕府四職の一角に名の連ね、地元では播磨一円の守護領国化を推し進め、一族の繁栄を確固たるものとしてゆくが、赤松氏が実際に四職の地位を確立したのは、則祐の嫡男義則の代になつてからであり、円心・則祐は、その地固めに奔走したのであった。

ところが、足利尊氏が再び復歸して、室町幕府の体制を整えなおしてから以後、北朝が一気に優位に立つて、た

ちまち南朝を圧倒し去ったかと言えさにあらず、本・当・の・南・北・兩・朝・の・対・立・は、む・しろ・それ・から・深・ま・つ・た・と・言・つ・て・よ・く、實質的に北朝が南朝を吸収して決着を付けるのは、足利三代將軍義満の代を待たねばならず、円心・則祐の在世期からみても、約半世紀近い後のことであつた。

では、京都に室町幕府を開いた足利氏が、はるか大和の山中に漸く命脈を保つに過ぎない、とさえ思われた吉野朝を攻略するのに、何故これ程の手間暇が掛かつたのであろうか。それは、室町幕府開幕早々に新たに始まつた、足利氏内部の足の乱れにあつた。即ち足利尊氏は、当面吉野朝を押さえ込んだと思つた瞬間、こんどは執事高師直・弟足利直義・そして我が子で二代將軍の足利義詮との間にすら、三ツ巴・四ツ巴の対立抗争を引き起こしてしまつた。これが世に言うところの「観応の擾乱」である。

ただ本稿は「観応の擾乱」そのものを説くのが目的ではないので、さしづめ簡略に留めたいが、ここに足利尊氏は、征夷大將軍となり室町幕府を開いたとは言え、幕下の諸將は全てが股肱の臣ではなく、足利氏に味方した外様の將の寄合所帯の性格が強く、赤松氏自身がそのような一人であつた。そこで足利氏の内部紛争に、彼らはそれぞれの思惑から、尊氏・直義・師直の誰かに加担して、権力闘争に参加するが、ここで思惑がはずれ、主君と仰いだその者が万一誅伐でもされてしまえば、味方した自分もまたたちどころに命があぶない。そこで彼らは、知謀の限りを尽くしてより強い方に加わらんとし、戦況悪しとみればいつでも主を棄てて敵へ寝返り、好転すればたちまち帰参するなど、自己の武運・命運を賭けて離合集散を繰り返した。

しかも注目すべきは、足利尊氏や直義など乱の主人・公・た・ち・ま・で・が、それぞれ相手方を牽制するために、共通の敵である筈の、その吉野の南朝と度々和議を結び、また南朝への帰参を申し入れたことであつた。これに対して南朝は、もとより「得たりや。おう……。」とこの対立へ介入して来る。従つて擾乱は、いったい誰が本當の敵か味方か

よく分らないような、ますます複雑な勢力展開を引き起こした。

この事態の最中に、赤松氏内部にも大きな異変が起った。それは、赤松氏の大黒柱である彼の赤松円心が、観応元年（一三五〇）一月十七日、京都の七条邸で没したのである。そこで足利尊氏は、早速円心の長男範資に、円心の遺領の相続を安堵した。そこで範資は尊氏の幕府方に大いに味方し、領内の反尊氏勢力を抑えることに努めている。

そして翌観応二年（一三五二）早々、足利尊氏と弟直義の抗争が頂点に達し、一月七日に足利直義は、八幡を出て兄尊氏を討とうとした。そこで一月十日赤松範資は尊氏方に付き、直義軍と大渡で戦った。

尊氏は当然赤松氏を頼って播磨に入り、書写山下の坂本城に寄った。二月四日には、尊氏の命を受けた赤松則祐は、直義方の石塔頼房を、光明寺城に攻めている。

ところが二月十四日、こんどは直義方の細川顕氏が、書写の坂本城に攻めてきた。こんどの戦局は尊氏方の不利に動いて、尊氏は畿内方向へ退き、兵庫の一戦でも直義軍に破れ、とうとう赤松範資の湊川城に籠城する羽目に陥った。ところが、戦いの裏側で秘かに続けられていた、尊氏と直義の間に一時の和議が調ったので、尊氏は漸く湊川城を出て、京都へ戻ることができたのであった。

然るに四月八日、その赤松範資が急逝を遂げてしまい、赤松氏の内部にまたまた大きな権力の空白が生じた。この空白を急ぎ埋めるべく、円心の三男則祐が、播磨守護職と併せて、赤松氏の惣領をも相続した。ここに初めて、赤松則祐の晴の登場を迎えることになる。

しかし、赤松氏の惣領を継いだ則祐の肩には、すぐさま数々の大問題がのしかかってきた。即ち、外部の困難はひとまず置くとしても、赤松氏の内部においても、三男である則祐は、次兄である赤松貞範を跳び越えて惣領に付

いる。しかも父円心と則祐はおよそ尊氏方であつたが、貞範はどちらかと言えば直義方であつた。従つて、則祐が一家の和と結束を保つためには、この次兄に対する格別の心配りが重要であつた。

続いて則祐は、守護領国内の播磨の武士層をしつかりと掌握し、その全てを赤松配下に統率して忠誠を誓わせ、中央の政局の動きに腐心する最中に、足元から結束を乱されるような事態を、絶対に引き起こしてはならない。

そこで、再び中央の政局の方に話を戻すと、尊氏と直義とが戦つていた観応二年二月に、直義方の上杉能憲が、鼎立の一脚である高師直・師泰を殺したので、まず一つの奸が除かれた。すると尊氏・直義の兄弟は、成立していた和議を再び解消して最後の雌雄を決する方向に向かい、七月に入ると、その対立は誰の眼にも明らかとなつた。この時に赤松則祐のつた行動は目を見張るものがある。と言うのは、その七月二十一日、赤松則祐は護良親王の遺児である赤松宮を奉じ、南朝への帰参を鮮明にしたのであつた。その翌二十二日には、直義党に属する兄の赤松貞範が京都を去つてゐる。その後九月中に播磨・摂津の直義党を制圧した則祐は、十一月二日に上洛して南朝方と和議を計り、その則祐の仲介努力によつて、やがて北朝と南朝との正式の和議が成立し、北朝もまた南朝の年号である「正平」を用いるまでになつたのである。

では、こうした赤松則祐の政治的賭とも言える行動が、どうして成功したのであろうか。去る七月の段階で尊氏は、則祐の南朝への帰順を自分への反乱と観て、誅罰を考えていたふしがみられるが、近江の佐々木道誉が南朝帰順に行を共にしたこともあり、意外の勢力の大きさに手を出しかねたようでもある。そこへ、直義もまた兄への對抗から、かねてより南朝へ度々秋波を送つてきたところである。

しかし、このような事態に追い込まれた足利尊氏も、さすがに策謀にたけた大将であつた。即ち足利尊氏は、こんどは彼自身が一転して熱心に南朝への接触を計り、八月には、尊氏・義詮父子は南朝に奏して京都へ還御を請う

までになった。そして十月になると、南朝は尊氏の帰順を許したばかりか、直義の追討をさえ命じるに至った。かくして足利尊氏は南朝・北朝の双方から直義追討の大義名分を取り付け、尊氏軍は「官軍」、対する直義軍は完全に「賊軍」の汚名を着せられてしまった。ここに尊氏と直義の勝敗は完全に決し、直義は十二月二十六日、鎌倉において遂に毒を飲んで果てたのであった。

さて、こうなってみると赤松則祐の南朝への帰参は、結果的にも足利尊氏自信の南朝接近の道筋を付けたことにもなり、まさに主人の意に沿うものとなったのである。然らば、この政治的大成功の過程で、その九月に、この度の隨願寺行基菩薩像は造立されたのであった。

ここで、この度の行基菩薩の造立を、ひるがえって地元の側から観直してみよう。すると、地元播磨の住人としては、ここに立ち上がった新守護は、室町將軍家に直接に結びつき重んじられている、まことに有力な人物である。そうと分れば、ここは真先にその下へ帰属服従の声を上げ、忠誠の心を示しておかねばならない。ことに地元の有力寺院なればこそ、新守護に今後とも大檀那として庇護を垂れてもらわねばならない立場にある。ここに隨願寺の役僧は一山を挙げて新君主を賛え、新君主の政治的行動をしつかりと見定めた上で、開山の行基菩薩像を新たに供養する形を仮りて、新君主の武運長久と、事の成就を祈願したのではなかったろうか。

しかもそれ程重要な像であるならば、それこそ京都の有力な仏師を迎えて丁寧に造らねばならないし、そうすることがまた、新守護赤松則祐公を尊重する意思表示にもなったことであろう。さらにひるがえって、京都仏師の大藏卿法印定西にとつてもまた、「当山大仏師」として隨願寺の造仏権益を、しつかりと確保する道でもあったのである。

一方、新守護赤松則祐への忠誠表明の如何は、在地寺社勢力以上に、在地武士団にこそより重要且つ深刻な問題

であろう。ここに登場するのが墨書④で示されるように、「惟宗朝臣」を本姓に名告る武士一族の、檀那としての集団結縁である。この交名の中で筆者はまず、ことに「大野」、「小河」という別姓を特記された人物、特に「小河」姓の人物の存在に注目してみたい。即ち、この時期より少々後になるが、「小河」、「小川」を名告る在地武士が、赤松氏による播磨一国の守護領国化の推進に、重要な関係を持つてくることが、既に指摘されているからである。

ここに、室町時代の政治史の上で、鎌倉時代以来の「守護」が、やがて自己の統治するその国を一円知行して守護領国化をはかり、やがて「守護大名」へと発展していく過程を究明することが、根本的な大命題の一つであるが、そのためにも守護は、国内に占領している在地の国人層を一括して被官化し、守護の家臣団に組み込んでしまわねばならない。そこで、この守護領国制進行の中で、主君たる守護と、その家臣となる国人たちの主従関係が、どのように結ばれていくかが問われることになるが、これまで、その典型的事例として注目されてきたのが、赤松氏の播磨一円領国支配の方向と、国人小河（川）氏との関係であった。

このような小川氏を丁寧に究明された一人に、まずは岸田裕之氏が上げられ、岸田氏は、およそ赤松義則の明德以後に活発となる小川氏の行動から、赤松支配下の守護代には、「上位」と「下位」の階級差があり、小川氏はその上位守護代であった、とされた。

これに対し伊藤邦彦氏が、「上位守護代と下位守護代の存在」そのものに疑問を呈され、小川氏はむしろ「国衙目代」としての活躍ではないか。と論じられた。また岸田氏が、小川氏が書写山南麓の坂本に拠点を置いていることから、史料に登場する「坂本方」を全て小川氏を指すと解される傾きにも、坂本を拠点とする武士は一人小川氏にとどまらない、と疑問を出されている。

これと関係してか榎原雅治氏は、矢野莊内でもある山陽道ふたつぎ二木宿に住し、高利貸や人夫手配など、手広く経済活動すら行っていた「二木方」小川氏の存在を指摘され、少なくとも史料に登場する小川氏は、この二派のどちらの人物かを弁別してゆく必要がある。と注意を喚起された。

さらに三宅克広氏は、これら小川氏を赤松氏の「奉公人」としての働きの側から、いろいろ照射を当てておられる。

以上のように、播磨の国人小河（川）氏については、中世の専門家が幅広く議論を進めておられるところなので、門外の筆者は、今後の研究の進展を楽しみにしていかうかがいつつ、ただ本稿では、墨書に登場する「右衛門大夫清直小河」の出自関係についてのみ述べておきたい。

さて、赤松氏は元来佐用荘の「地頭」から立ち上ってきたが、一方小河氏は「国衛目代」をつとめていたように、元来は国衛の「在庁官人」層から興ってきた家柄であること、故に小河氏は赤松氏にとって股肱こつこではなく、全くの外様に過ぎなかったことは、衆目の一致するところである。その意味で岸田氏は小川氏の源流にも辿られて、『正明寺文書』を引用しつつ、その先祖は「越中前司」、その孫として「豊前権守」が上げられているように、彼らは明らかに「国司」の家柄で、鎌倉時代の建長年間に、姫山の称名寺（正明寺）の造営に当って、播磨国衛領平野北条の是松別名を寄進している事実から、小河氏の先祖は恐らく国衛領留守所の一員で、少なくとも鎌倉初期には播磨国に土着し、国衛在庁官人になっていた、と推定されている。

そして、室町時代中期に特に活躍の目立つ「小河新左衛門入道（備中入道）玄助」の言として、「小河先祖光阿」が居り、その光阿は文和年間に国衛小目代として現れているので、岸田氏は、「小河氏が守護被官化された時点が、この光阿の代であったことを推測させるのである。」と延べておられる。

ところで、本章で取り上げた諸氏の論攷は、いずれも明徳期以後の小河氏を論証しておられるのであって、則祐の代に遡つての小川氏への言及は殆どみられず、ことに岸田氏は、「上位守護代小川七郎入道のそれ以前の状態を識り得る史料は管見の範囲にはない。」とさえ明言されている。とするならば、今回登場して小河右衛門大夫清直は、彼が則祐の代であることからみても、小河氏として最古の登場人物となるのではなからうか。

しかも、「小河先祖光阿」が岸田氏の説かれるように文和時代に見出されるとすれば、「観応」は「文和」の一つ前の年号であり、しかもただの二年間しか続いていない。従つて本墨書④にみえる「右衛門大夫清直小河」とは、ひよつとすれば「小河先祖光阿」その人の俗名か、とさえ思えてくるのである。〔図15〕

そしてその小河清直が「惟宗朝臣」諸氏に取り囲まれつつ書されていることは、小河氏の本姓もまた「惟宗朝臣」であつた可能性を推測させ、その事に触れた記録としても、本墨書は恐らく初めての事例なのではあるまいか。

〔図15〕

次いで、「大野誓阿弥陀仏」の大野氏については、三宅克広氏の言及があり、赤松氏の在京奉公人の一人として、康暦二年（一三八〇）一月二十四日から至徳四年（一三八七）五月八日まで史料に登場する、大野行智の存在を明らかにされている。すると、誓阿弥陀仏がたとえ行智と同人ではないとしても、大野氏の歴史登場に関して、これまた初期の人物ではなからうか。さらにその大野氏もまた、惟宗朝臣に属する一族であつた可能性は、小河氏の場合と同様であらう。

そして第三に、その惟宗朝臣そのものもまた、矢野荘に関りつつ既に平安時代から当地に居住していた証として、保延三年（一一三七）十月二十三日付『矢野荘立券文案』に「下司散位惟宗朝臣在判」の署名者が居ることを示しておく。また鎌倉時代の例として『兵庫県史』は、建長元年（一二四九）八月付『播磨国留守所符案』（正

明寺文書）末尾の留守所役人の連署十二名の中に惟宗が混じり、また播磨清水寺が貞応元年（一二二二）五月に、定額寺としての証判を国衙に要求した文書の末尾に、「散位惟宗朝臣」以下十二名が証判していることを上げ、播磨国衙在庁官人の中の惟宗氏の健在を明らかにしている。

第四に、墨書③「図14」に「中原氏女」とある中原氏も、『兵庫県史』によれば、承久四年（一二二二）二月に、播磨国衙検非違所の「一方庁直職」を代々相伝の私領として北条泰時より安堵された、中原如意丸なる者が居ることから、中原氏もまた在庁官人系の国人の家柄であろう。

さて、以上述べてきたことからして、観応二年という年に、彼らの眼の前にすつくと立った新守護赤松則祐と、守護領国制の実現に向う赤松氏による強い政治圧力を前にして、己が赤松氏にとつてはただの外様に過ぎないと自覚すればする程、誰よりも真先に忠誠の声を上げておくことは、新しい時代の波の中に生のかたまりを求める、在庁官人惟宗朝臣の一族たちにとって、何よりも肝要の大事だったのである。

第四章 木彫行基菩薩像の作風上の特色

第三章では、本行基菩薩像の墨書銘文を分析・解釈することによって、造像経緯と、その歴史的背景を探った。そこで本章では、もう一度改めて、本行基菩薩坐像の形姿を、素直に観照し直すことから始めよう。〔図1〕

まず本像の全身正面の形姿については、第二節（一）の冒頭で触れているが、問題は、その形姿がそのまま行基菩薩の標準図像に一致するかどうかであろう。

ところで、中世における国指定の代表的な行基菩薩像は、奈良・唐招提寺にある彫像と画像（共に重文・鎌倉）

〔図16・17〕で、この彫像・画像に共通する特色は、両手が隨願寺像のように禪定印ではなく、左手に如意を、右手に数珠を執ること。衣の上に袈裟はみあたらない一方、右肩から右腕にかけて頒布の一部を絡ませるか、または長く垂らしていること、そして、後にも注目するように、隨願寺像では黒衣の後襟が殊更に高くなっている〔図2・3〕が、唐招提寺の後襟にはさしての誇張は認められないこと、その唐招提寺像の僧衣や頒布は、いずれも単純な黒法衣ではなく、むしろ五彩の織柄を交えた色法衣であること、などの諸特色が数えられる。そこで、このような唐招提寺像の形姿が行基菩薩の標準図像であるならば、この図像とは全く一致しない隨願寺像は、外見上ではこれを即座に行基菩薩と判定することはおよそ困難であり、そこで我々がこの隨願寺像を行基菩薩と本当に認識するのは、彼の胎内墨書に、本像が行基菩薩であることを明記しているからに他ならない。

では何故このような行基像が造立されたのかと言え、観応二年当時の隨願寺における本像の発願は、寺僧たちの純粹な行基信仰によつて生まれたのではなく、むしろ多分に、当時の隨願寺の立たされていた政治的狀況に關つていたからである。従つて当時の隨願寺にとつては、「行基菩薩像そのものを造立すること」が重要なのであつて、その像が正しく行基菩薩の図像に則つているかどうかは、少なくとも二の次の問題に扱われていたように思われる。では、隨願寺はこの行基菩薩像を、単に一般僧侶像の形で表したに過ぎないのであるか。いや、恐らくそうではなからう。第三章で述べて来たように、本像には「当国守護」たる赤松則祐への、隨願寺僧侶の厚い思いが懸けられている。そして墨書①〔図10〕では、則祐に律師号を付けているが、赤松則祐の律師号は多くの場合、「律師」「權律師」「帥律師」と称されるのが普通であるのに、墨書①〔図10〕を精読すると、なんと「妙・禪・律師」と書かれている。

しかも興味深いことに、この観応二年九月に相前後する『園太暦』卷四・観応二年八月二十日条の記事は、赤松

則祐を「赤松妙善」と、また同・観応二年十一月二日条では、「赤松妙善律師名字則祐」と呼んでいるではないか。とすれば、この当時の則祐の律師号には「ミヨウゼンリッシ」が用いられ、その書し方は「妙禪」が正統で、「妙善」はその音通転訛と考えられよう。尤もこれは、筆者の経験的且つ常識的な判断でもあるが、それと共に本像が、やはり禪定印を結ぶ坐像であることも関連している。

もともと鎌倉時代以来、有力武士は禪宗に帰依するのが慣習で、室町將軍家は勿論のこと、赤松円心は苔繩に、雲村友梅を開山に迎えて法雲寺を興しているし、則祐もまた後に、同じ雲村友梅を勧請開山とする宝林寺を建てた。そして、現在の宝林寺に遺る伝赤松則祐坐像（重文・室町）「図18・19」は、明らかに禪宗法体験である。故に赤松則祐法体のイメージを、隨願寺の僧がこの行基像に重ね合せていたとするならば、本行基菩薩像が禪定印を結ぶように表されたのも、十分に理由のあったことではあるまいか。ただし、隨願寺の行基像と宝林寺の則祐像とは、これまた相似るところは全く無いから、隨願寺像がそのまま則祐の肖像と言うことではなく、やはりあくまで行基菩薩像であることには変りない。

次に、本行基像の全身を、もう一度正面から観なおしてみる「図1」と、肩や胸が両横に張った重々しい胴体に対して、頭部が意外に小さな印象を受けはしまいか。また、像を側面から観る「図2」と、胸部から腹部へ、更に膝・腰部へと、胴体は下方に向えば向う程急速に奥行が増しており、これは一見体軀に安定感を与えているようでありながら、一方では、まるで沈み込んで行くような萎縮感を伴うことも否定できない。しかもこの側面において、いや、背面「図3」からみれば一層明らかであるが、本行基菩薩像の衣の後襟が極端に高めてあり、その分頭部の後首部分が襟の中に隠れてしまい、それだけでなくも小さめの頭部が、ますます胴に沈み込む印象を強くしている。

この一見しては堂々たる張りをきかせながら、根底では何か逆の萎縮感をも内包するようなフォームは、仏像彫

刻の芸術的發展がいよいよ押し詰り始めた十四世紀以降の、その歴史的運命とも言える、善惡を超えた限界なのであるが、それにしても、頭部と体部との大小に、このような不均齊が感じられるような造像結果は、大仏師大藏卿法印定西の表現に、何らかの破綻と力量不足の評価を、觀者に与えかねないのではなからうか。

ただ筆者は、表現者である大仏師定西を、そのように冷たく見離すのではなく、次のような事情もまた、併せて考慮すべきものと考ええる。と言うのは、大仏師定西はこの行基菩薩の姿を、最初から頭・体一貫した人間的全身像として把握したのではなく、どうも頭部は頭部、胴部は胴部として別個に把握し、完成時点で両者を継ぎ合わせた結果なのではないか。と観るのである。それは、本行基像は寄木造・挿首の手法で造られているが、それはまた普通と言う挿首手法とも異なり、首部は胴に挿されているのではなく、胴部上端の襟底の、その棚状部に安置されている、と言う情況とも関連して判断している。

さてここで、我が国固有の造像法の一つである「挿首」を、予め解説しておこうと思う。既に衆知のように、平安時代に入ってから我が国の仏像の殆んどは、木彫仏に一元化されるようになったが、その平安初期に登場した「一木造」は、仏像の頭・体の根幹材を一材木取する手法である。ところが一木造では、材内に木心が残っていると、日を経ずして像の表面に干割が走るようになる。これを防ぐため像の胎内を内削して、この木心を除去する手段がいろいろ開発された。

その当初は、像の頭や体軀の背面に窓状の穴を開けてそこから内を削り、後で別材の蓋板を貼って穴を塞いでいたが、これでは木心の除去が不十分と言うので、材を一定の「木割法」に基いて前後や左右に割り放し、像の内側に当る部分を完全に削り去ってから矧ぎ合することが考案された。この手法には大きく二つの造像利点が明らかとなつた。

- ① 像の胎内が完全に空洞化することによって、最早像の表に干割が全く生じなくなったこと。
- ② 割り放された材を多くの仏師に分担させ、像の各部の彫成を同時進行させることによって、造像時間を飛躍的に短縮することに成功したこと。

であった。

そしてさらに、頭部材と体部材とを切り離し、頭部は頭部として、体部は体部として同時進行的に彫刻と内割を施せば、より無理のない造仏が可能となることを発見し、一材の中の頸廻りに当る箇所へ鑿を打ち込んでゆき、遂に頭部材と体部材とを切り離すようになった。この手法を「割首」と言う。

そこで、彫り上った頭部の首下には、円筒状の「首柄」が下方へ伸び、一方、体部材の頂上には、首柄に対応する「柄穴」が開くことになるので、頭部材と体部材とを木目に合せて元の通り継ぎ戻せば、頭部首下の柄と体部頂の柄穴はぴったりと合つて、頭部はしっかりと体部に填め込まれる。そして、ここに生ずる頸廻りの矧目は、木屎漆や、場合によつては布貼までも施して、首が胴から貫けないよう、両者を一体化させる。そこで皆様には、今筆者が最後に指摘したことを特に注意しておいていただきたい。が、とにかくここに我国の木彫手法には、先の一木造から一段発展した、「割矧造」の造像体系が確立することとなった。

そこで割矧造となつてからは、これまで頭・体を一材木取にするといいながら、実際は木割法によつて数材に分け、彫り終わつてから矧合せてきたのであるから、それならば、もう今までのように一材木取りに拘らず、それぞれの部分材を最初から別材で調べておけばよいのではないか、という新たな考え方がおこり、それまでの木割法に準じて定められた、新たな「木寄法」に従つて各部材を調成し、これらを矧合す手法が開かれた。これが世に言う「寄木造」である。

ここで注目すべきは、寄木造では最初から頭部と体部は別材となるから、完成した彫刻において頭部の首下が体に挿されることは、なおさら必然となる。即ち挿首^{さしくび}である。故にこの度の随願寺木彫行基菩薩坐像は、まさに寄木造・挿首の手法が適用された像なのである。

ところが、本像の首のみは一般の例とは異って、胴に挿されることなく、単に体部頂上に置かれてゐるに過ぎないのなら、このままでは、この頭部はまことに不安定であらう。そこで本行基像では、首廻三方の襟を殊更に高く立て、襟の内側をそのまま衲穴部に造り〔図4・5〕、一方、頭部の後首廻りは何も細部を彫らずに衲状に造り〔図6・7〕、かくして首を胴体ではなく襟内に挿したのであった。

そしてこの首は、もとより体に固定しようとする造作は一切行なわれていない〔図8〕ばかりか、むしろ場合によつては、この首が体から抜き去られることを、前以つて予想させてゐるのである。と言うのは、先にも述べたように、本像の後襟の内面は、事実上は首衲穴の内壁に過ぎないから、通常ならばその面が人目に触れることは考えられず、粗彫・素面であつても何ら差支ない。ところが実際の襟内は、表面が滑らかに彫り整へられているばかりではなく、その面が白色に塗り上げられている〔図5〕ではないか。それは即ち、この首の後には白下衣の襟が廻つてゐることを表した、いかにもリアルな表現を示している、とも言えようが、それはとりもなおさず、万一の行基菩薩の頭を抜き去つて、体部だけ〔図4〕を拝んでもなお、その御体としての現実性を失わないように、との特別の配慮が成されてゐることを意味してゐよう。

では随願寺は、この行基菩薩の造像において、何故これ程に複雑な配慮を施したのであろうか。それは一重に、第三章で述べた赤松則祐と寺自身の政治的立場に関連しているように思われる。再度述べるように、観応二年当時の随願寺は、当国守護赤松則祐が、足利方でありながらなお南朝に帰順しようとした政治的迷惑を十分に理解して、

事の成就をこの像に祈願すべく、造像の次第を詳しく胎内に墨書して遺した。けれども則祐を始めとするその後の赤松氏が、本心から南朝方になびいたのではなく、則祐自身が、「観応の擾乱」と言う世情を熟慮した上で取った、一時の政治的方便に過ぎなかった。事実、尊氏や則祐による南朝方への帰順の推移をみると、吉野朝方は、此の度の足利氏の当方への歩み寄りを、北朝方そのものの弱味と受け取り、間もなく和議を反故にして突然に京都に攻め込み、一時は二代將軍の足利義詮を京都から追い出して主都を占拠し、直義討伐のため関東に下っていた、足利尊氏の心胆を寒からしめた。ただし、その後尊氏はすぐに反撃に出て、南朝方から京都を取り戻したばかりではなく、高師直や足利直義が倒されて、最早「観応の擾乱」の原因が完全に払拭されたとみるや、室町幕府は再び南朝の打倒に向かうようになり、赤松則祐自身も、あれ程に厚く擁立していた赤松宮を、その後はあっさりと棄て去るのである。

ところが、時勢が再び北朝優位になびくようになると、その胎内に南朝帰順の記録を残す隨願寺行基菩薩像は、赤松氏にとつても隨願寺にとつても、甚だ微妙な存在となるであらう。即ち、もしも誰か仇敵がこの胎内記録の存在を知り、「赤松氏に室町幕府への反意あり！」とでも密告すれば、赤松氏の将来を左右する大事も引き起しかねない。従つて、政治情勢の変化によつて、本像の存在が彼らに危機をもたらすと判ぜられれば、この像の頭部と体を早やかに分離して、体部を別に隠してしまうか、万一の時には体部そのものを破却して、疑念の抱かれ易い墨書を、この世から一挙に消し去ることも必須となる。ただし、その頭部まで見咎めなれることがあったとしても、「いいえ、これはどこまでも当寺開山の行基菩薩様に過ぎませぬ。」との言い逃れは、これまた十分に可能であらう。

そして、ここに最も重要なことは、たとえ体が無くとも頭さえ遺つておれば、その行基菩薩の存在と本質は、少

しも損なわれてはいない、と言うことである。事実、今頭部のみ「図6・7・8」を取り上げて観た行基菩薩像は、我々にとって本当に、本質の抜け去った死首に過ぎないであらうか。いや、むしろこの頭部は、我々に向ってますます氣韻生動し、むしろ怪しいまでの靈氣すら放ってくるのではないか。この時我々は、この頭部にこれ程の魂を籠め入れることのできた、大仏師大藏卿法印定西もまた、紛れ無き一人の芸術家であったことを、はつきりと確認するのではあるまいか。

以上それはそれとして、今までの心配は全て杞憂に過ぎず、この行基菩薩像が本来在るがままの御姿で、ずっと守り続けられることができたならば、これまたまことに結構なことであるが、果せるかな、隨願寺当局の心配は幸いにも文字通り杞憂に終り、造像以来およそ六四〇年を経た今日、我々がその在りのままの御姿での行基菩薩像を拝することができたことは、まことに有難き仏縁であつた。

結　　び

以上、今回唯一の軀に過ぎない隨願寺木彫行基菩薩坐像に対し、これ程の字数を用いたことについて、あるいは論致煩瑣のお叱りを蒙ることを恐れてはいるが、ここに発見された本像が、意外に豊富な歴史的内容を蔵していることに、識者の御眼を開いていただく縁となれば幸とするものである。

そして、本稿の作成に当り、まず美術史的考察の部分に関しては、著者の前任校である岡山大学文学部芸術学・比較文化学研究室の資料を参考にさせていただき、続いて、胎内墨書について齋藤の調査解説の結果を、岡山大学の定年後、引き続き京都橘女子大学教授となられた狩野久氏、及び、梅花女子大学教授馬田綾子氏に、実地点検

をお願いした^⑧。そして馬田綾子氏と、岡山県教育庁文化課の三宅克広氏より、特に惟宗・小河・大野各氏について、資料提供や各種の専門的御意見を頂戴した。さらに、筆者と同じく関西大学文学部史料学科出身で、姫路市教育委員会文化課に勤務される宇那木隆司氏にも、筆者の随願寺調査の仲介と補助の外、赤松氏をめぐる関係諸論攷の教示や提供に、多大の労をおかけした。最後に、図16・17の唐招提寺藏行基菩薩坐像（彫像・画像）は岩波書店より『奈良六大寺大観 唐招提寺一』・『同二』より複写することをお許しいただいた^⑨。

以上の方々に、末筆ながら感謝の意を捧げつつ、愚稿の筆をとめることにする。

註

① 因みに、現姫路城の建つ姫山には、中世には称名寺（正明寺）と言う寺が在った。この称名寺を移動させて、姫山に最初の城郭を構えたのは、貞和年間の赤松貞範である。

② 『兵庫県史 史料編 中世三』に収録。ただし本文の表題は「播磨国増位寺集記」となっている。

③ 例えば『姫路市史 第二巻』第三章四節、三八八頁～三九〇頁、「増位山随願寺」や、『同 三巻』第一章第三節、七五頁～七九頁、「三、随願寺（姫路市白国）」など。

④ 石塔寺は、現在も滋賀県蒲生郡蒲生町石塔に所在し、ここに言うところの石塔は、百済様式を継承しつつ我国で造立された三層石塔として、現存最古の石塔作例であり、恐らく七世紀代後半に遡り、もとより重要文化財に指定されている。

⑤ ここに「観応の擾乱」と、その前後の赤松氏の動向について、筆者は次の論攷を参照した。

高坂好著『赤松円心・満祐（人物叢書一五五）』吉川弘文館 一九七〇

『兵庫県史 第二卷第二篇 中世「I」』第四章 南北朝の動乱

『室町幕府守護職家事典 上巻』伊藤邦彦「赤松氏」新人物往来社 一九八八

岸田裕之著『大名領国の構成的展開』「守護赤松氏の播磨国支配の発展と国衙」吉川弘文館 一九八三

伊藤邦彦「播磨守護赤松氏の〈領国〉支配」『歴史研究』三九五号

梶尾雅治著『日本中世地域社会の構造（歴史科学叢書）』第二部第四章「地域社会における街道と宿の役割——中世山陽道と宿の諸相——」第二節「室町期の宿の長者」校倉書房

佐藤進一著『室町幕府守護制度の研究（下）——南北朝期諸国守護沿革考証篇——』八二頁—九一頁 東京大学出版会

三宅克広「播磨守護赤松氏奉公人の機能に関する一考察」『古文書研究』二八

同「守護奉公人奉書に関する基礎的考察」『法制史学』四〇号

青山英夫「室町幕府守護の領国形成とその限界——播磨国守護赤松氏を中心として——」『上智史学』一四

⑥ ただし、尊氏方に着いた円心と則祐に対して貞範が直義方であったのは、それがそのまま赤松氏内部の不和を示しているであろうか。それとも、幕府中枢の対立に帰趨がなかなか定まらない時、配下は一族を二つにも三つにも分けてそれぞれの対抗者に加担させ、万一に一方が破れて誅伐されても、もう一方の一族によって一家の命脈を保とうとするのは、乱世における生き残り戦略として当然でもあろう。従って今回の赤松氏の場合、このどちらなのであろうか。中世史の御専門の向きより御教示をいただければ幸である。

⑦ なお赤松則祐は、佐々木道誉の女を娶っている。

⑧ ことに随願寺としては、近くにある書写山円教寺や広峯神社の存在を、強く意識せざるを得ないであろう。従って、増位山の寺格を彼らと対等に保つたためにも、新しい守護の心をつかむことは、きわめて重要であったのではなからうか。

⑨ この以後の論述は、註⑤の諸氏によっている。

⑩ 岸田前掲書 一七二頁

⑪ 同 一六五頁

⑫ 同 一六三頁

⑬ この墨書での「小河」氏を「惟宗朝臣」に結びつけるのはやや尚早、と言う意見が出るかも知れないが、後の「小川新左衛門入道玄助」に対して、本墨書では「惟宗朝臣左兵衛尉永助」が居り、「右衛門太夫清直小河」には、「惟宗朝臣左衛門尉行直」が、同族として対応するのではあるまいか。

⑭ 三宅克広氏編「播磨守護赤松氏在京奉公人奉書一覧表」による。また、その内の具体的史料の一部について、馬田綾子氏より御教示を得た。

⑮ 白川本東寺百合文書八六（『相生市史』所収）

⑯ 『兵庫県史 第二巻』二二五頁～二二六頁

⑰ この彫像は、元は行基菩薩の墓所である竹林寺に造立されたものであるから、行基菩薩像としてこれ程信の置ける作はない。なおまた、行基菩薩像の重文指定品としては、外に東大寺に一軀（重文・江戸）があるが、これらは恐らく唐招提寺像の写しである。

⑱ なお宝林寺は現在、兵庫県赤穂郡上郡河野原かみごの こうの はらに在る。この寺には則祐像のみならず赤松円心像や雪村友梅像（共に重文・室町）も安置されている。しかも近年開通した智頭鉄道が近くを通っており、そこに「河野原円心」駅も設けられた。この駅名のネーミングにも、隣の「苔縄」駅と共に、遠き昔の赤松円心・則祐に対する。現代人の歴史的郷愁が偲ばれて興味深い。

⑲ 従つて筆者は、この頭部内には、恐らく一字も墨書はないものと判断している。

⑳ この点は、東洋彫刻の本質に迫る根本的命題として幅広く論じる必要があるが、本論致では敢て避けておきたい。しかし一般の仏像彫刻において、たとえ尊体が破壊され仏頭のみ遺つた時にも、「仏像そのものの滅亡」ととらえることなく、遺つた仏頭は後世に守り伝えて、安置・礼拝し続ける事実が数多くあることを指摘するにとどめる。例えば、旧山田寺講堂本尊であつた現興福寺仏頭（国宝・奈良前期）の、その数奇な運命と伝来の歴史を想起されたい。

㉑ 狩野久氏・馬田綾子氏も共に姫路市文化財保護審議会委員である。

㉒ その他の図版写真は全て筆者の撮影である。

（さいとう たかし 佛教大学教授）

〈編集部注〉

本論文は、当日に配布された資料である。これは『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』上（同刊行会編、二〇〇三）に掲載されたものである。最終講義録に掲載するにあたり、齊藤孝先生からの要望で本紀要に掲載することとなった。転載にあたっては関西大学史学地理学会の御許可を得た。関係各位に篤く御礼申し述べる。

行基菩薩坐像胎内墨書

〔①根幹後半材内部頂上、首柄受座下面〕

當國守護赤松妙禪律師則祐

後醍醐御門

〔②根幹後半材背部内側〕

増位山行基菩薩 權律師俊賀

長吏權少僧都道快 道憲大德 阿闍梨源尊 隆賢、

隆胤、木成、快實、相舜、快宗、行長、道金

源秀、明義、快聖、快惠、朝俊、快弁、宗円

能賀、快春、明賀、隆覺、維弁、實源、快尊

快玄、隆惠、快緩、長惠、聖舜、道範、木賀

快暹、正秀、源慶、永鋌、御衣木加持東寺流阿闍梨快弁

洛陽大佛師大藏卿法印定西當山大佛師 大工掃部左衛門尉平宗長

塗師法阿弥陀佛洛陽住人也 結緣衆沙弥道教 比丘尼善阿 沙弥道長力

沙弥道耆 尚快 比丘尼源起 道忍 善阿 快重、

觀応貳卯年九月 日

〔③根幹前半材下方内面〕

大貳阿闍梨猷禪 權律師猷尊

兵部法眼定祐 禪棟上人 備中法眼定幸

中原氏女 尼妙覺 尼妙心 尼經阿

平氏女 同女子持一 犬熊丸

〔④右脇材内面〕

惟宗朝臣經清

小河 大野

右衛門大夫清直 沙弥誓阿弥陀佛

惟宗朝臣左兵衛尉永助

惟宗朝臣左兵衛尉行直

〔⑤左脇材内面小字〕

正信院中童兒千松丸

子

經清 行直



第1図 随願寺木彫行基菩薩坐像 全身正面



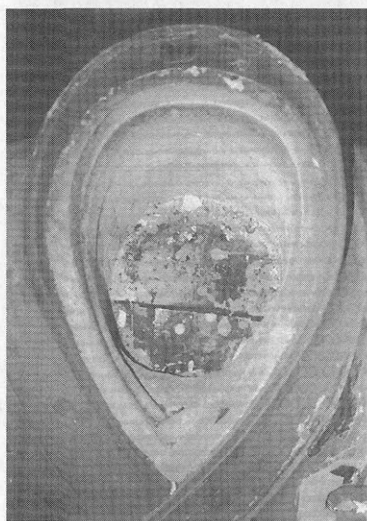
第2図 同 左側面



第3図 同 全身背面



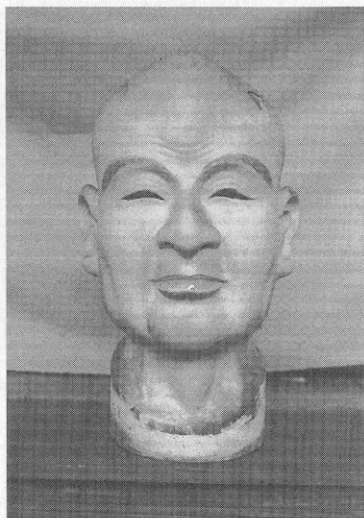
第4図 同 体部正面



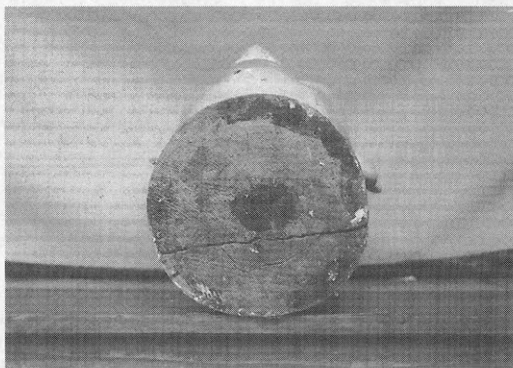
第5図 同 襟内見込



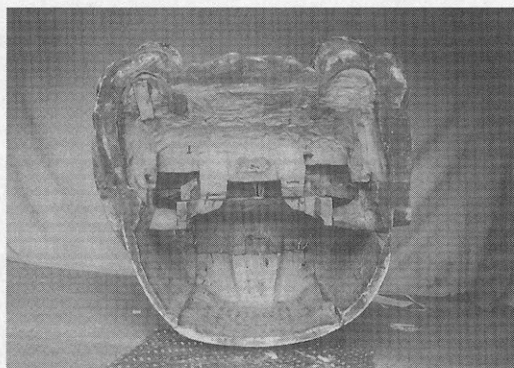
第7図 同 頭部右側面



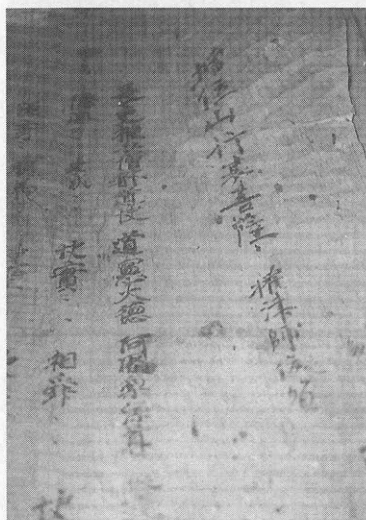
第6図 同 頭部正面



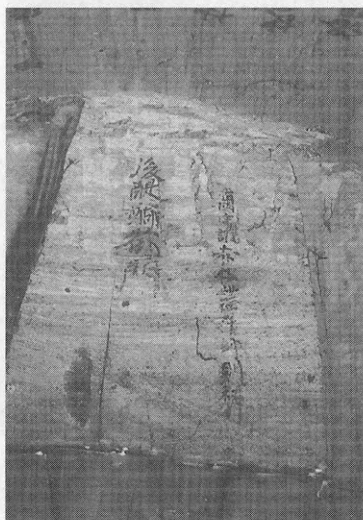
第8図 同 首柄下面



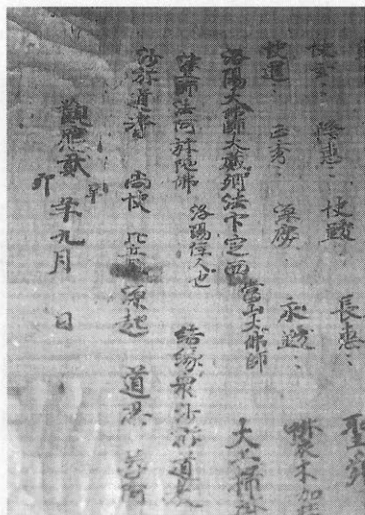
第9図 同 底裏より胎内を臨む



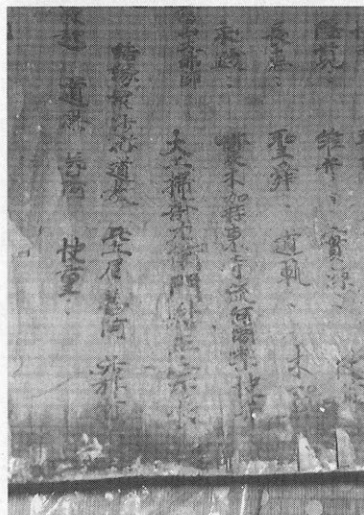
第11図 墨書② 冒頭 尊名



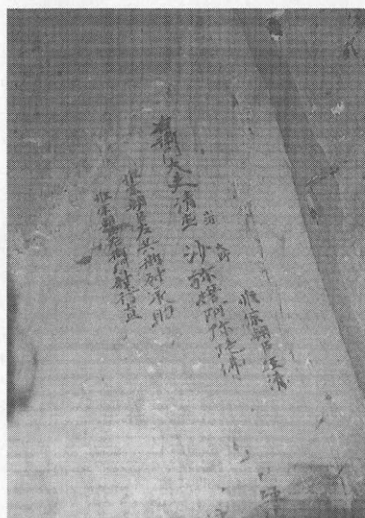
第10図 墨書① 全文



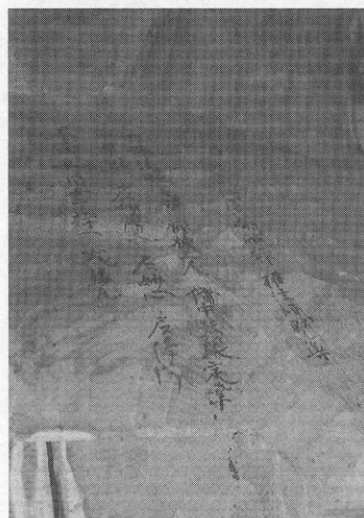
第13図 同 大仏師・塗師・年紀



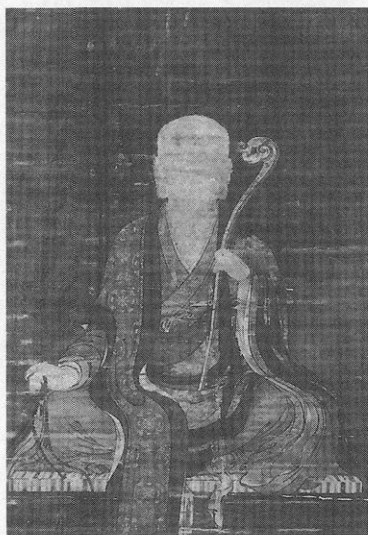
第12図 同 御衣木加持僧・大工



第15図 墨書④ 全文



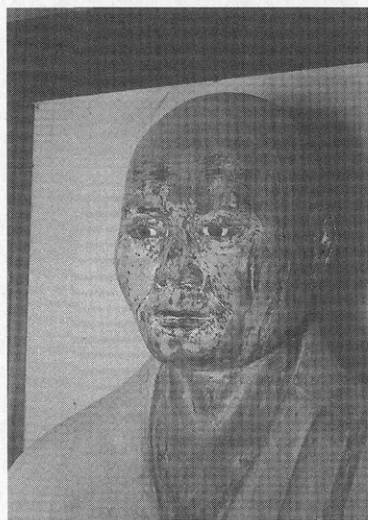
第14図 墨書③ 全文



第17図 絹本著色行基菩薩画像〔唐招提寺〕



第16図 木彫行基菩薩坐像〔唐招提寺〕



第19図 同右 頭部



第18図 木彫伝赤松則祐坐像〔宝林寺〕